



「架け橋プログラム」をつくるのは？ 渡るのは？

～ 3 回シリーズで「架け橋期の教育・保育の充実」についてお伝えします～

小学校においては、就学時健診が終わり、次年度入学してくる子どもたちや保護者の方とのファーストコンタクトがあったばかりだと思います。これから、4月の入学・学校生活のスタートに向けて、小学校の先生方にお知らせしたいことを発信します。



「スタートカリキュラム」や「小1プロブレムの解消」等は、既にどの学校も実践されていると思います。「架け橋プログラム」は年長から小1の2年間について、これまでの考え方や取組を踏まえて再構築したものといえます。新たに何かを始めるといよりは、これまでの取組を見直し、バージョンアップすると捉えてください。

【架け橋を渡るのは子どもたち】

子どもの成長や思考は日々つながっています。架け橋カリキュラムでは、幼稚園・保育園での経験や学び（芽生え）が、小学校での経験・学び（育ち）に円滑につながることを目指します。子ども本人の困り感や戸惑いを減らし、個々の資質・能力の伸長を進めることを目指します。

【架け橋をつくるのは全ての園・学校】

架け橋に段差や障害物があったら渡りにくいですよね。子どもの立場に立って接続を考えたときに、環境や学び、教師の関わり方などにおいて、工夫や配慮できることは何か考え、行うことが「架け橋をつくる」ことです。

実は、本市でも幼稚園・保育園側からの架け橋づくりはだいぶ進んでいます。次回はそのことについてお知らせします。



今回使用しているイラストは文科省「幼児教育と小学校教育がにつながるってどういうこと？（幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料）」から引用しています。こちらもぜひお読みください。